タイで考えたこと

羽佐田　透一*

ここ数年アジア各地を歩いてきたが、それが一年以上になった。中でも修士論文のための農村調査にもでかけたタイには、半年ほどいたことになる。その間に自分が体験したこと、そして考えたことの一端を話したい。

まず、タイの人々に接して驚いたことは、日本への興味・関心の高さである。ある人は金持国日本への憧れを持っているし、またある人は日本のテレビ番組などから、日本への親しみを感じている。一方、日本製品の氾濫や急速な日本企業の進出に、警戒心を抱く人も多い。それぞれの見方で日本は見られている。様々な日本への視線をひしひしと感じた。

では、われわれ日本人はタイのことをどう見ているか。そして、どのようなつながりを持とうとしているのか。一般的に指摘されるのは、「貧しく遅れた国」と見ていることである。この見方が、関心の薄さや貧困などの問題への同情、あるいは経済的利益優先のとらえ方に結び付いていると思う。これは、ほかの開発途上国に対しても言えることである。明治以降の日本では、「脱亜入欧」という言葉に端的に示されているように、「発展（開発）」＝「近代化」は、「西欧化」と同義にとらえられてきた。すなわち工業化によって経済的・物質的に豊かになることが「開発」と考えられてきた。その認識のもとに、アジアなど開発途上国を軽視または蔑視する態度が養われてきた。この開発観を見直すことなしには、開発途上国との健全な関係構築は望めない。このことについてタイのある村での農村開発の実践例から考えてみたい。

私が滞在していたのは、「タイの最貧地帯」といわれる東北タイのある小さな村である。この村では潅漑施設がないため、米の生産量がその年の雨の状態に大きく左右されることが最大の問題であった。また、化学肥料の使用や電化製品の普及によって出費が増え、出稼ぎで補ったり、借金に頼らなければならない必要が増しているという問題もあった。

このような問題を抱えた村で、タイの民間ボランティア団体が、村人ともに農村開発に取り組んでいた。そのプロジェクトの一つの米銀行は、村人から有志を募って組織を作り、米倉庫に米を集め、米の不足する村人に低利で米を貸し出そうというものである。これは、不作のときに米購入のために高利貸しから借金をしなくても済むようにすることを第一の目的としている。そして、さらに村人の相互扶助の伝統を生かしながら、農民組織による自主運営化を進め、村人が自

＊茨城高等学校

立できるようにすることが目指されている。

この村では、その他に水牛銀行、池掘りなどのプロジェクトが実施されている。水牛銀行は、耕作用として有用な水牛を貸し出すもので、耕うん機よりも村人の生活に適するものとして勧められている。池掘りは、村人の重要なタンパク源となる魚の養殖用・田畑への給水用として村人の生活に欠かせない溜め池を掘ることを資金援助するものである。これらのプロジェクトでは、村内で得られる資源を活用して、出費を抑制することが目的とされている。

これらのプロジェクトは、経済的豊かさを目的とするものだが、伝統精神・伝統技術の促進という精神的・文化的側面をも持つものである。民間ボランティア団体のスタッフは、このような総合的な人間の豊かさを目指す開発を、「人間開発」と呼んでいる。それは、経済的・物質的側面を偏重する西欧型の近代化とは異なった「もう一つの開発」を目指すものである。

話を元に戻すと、タイなどの開発途上国との国際理解を考える場合には、「開発」の意味を経済的・物質的に偏った西欧的なとらえ方だけしていたのでは、関係の見直しは出来ないだろうし、真の国際理解は成立しないであろう。また、開発のあり方の見直しは、日本国内の環境問題、人権問題や消費問題を考えていく上でも重要な視点である。その点、先にみたような農村開発の事例は、「開発」の意味を考え直すうえで役に立つものだろう。

しかし、質問にもあったように、開発途上国との国際化の問題について学校教育の場で実践するには、時間・場・教材など多くの困難があると思う。その点、現在、社会教育や学校教育の場で普及しつつある「開発教育」は、その問題を重点的に扱うものである。バナナを使った授業など優れた実践も報告されており、「開発教育」について学び、それを参考にして授業を工夫していくことは実践のために非常に有効なことだろう。